

O2-028

小児周産期病院における性虐待被害児への性感染症スクリーニング検査の実態について

相葉 裕幸¹、三井 真理²、大西 志麻³、
内田 佳子³、植松 悟子³、窪田 満⁴、山口 麻子⁵、
庄司 健介¹

¹ 国立成育医療研究センター 感染症科

² 国立成育医療研究センター 周産期・母性診療センター 不育診療科

³ 国立成育医療研究センター 総合診療部 救急診療科

⁴ 国立成育医療研究センター 総合診療部

⁵ 国立成育医療研究センター 医療連携・患者支援センター 医療連携室

【背景】

性的虐待・性被害の被害児には常に性感染症の可能性を考慮する必要があり、被害後早期の適切な診断と治療が求められる。米国では米国小児科学会などから性被害時のスクリーニング検査や性感染症の治療・予防についてのプロトコルが示されている。一方で、本邦においては明確なガイダンスはなく、また、本邦における性的虐待・性被害児の性感染症の疫学に関する情報は限られている。国立成育医療研究センターでは、性的虐待や性被害が疑われて受診した患者に対する性感染症対応に関して、検査項目や予防・治療に関するマニュアルを作成し運用している。今回我々は、性感染症スクリーニング検査結果や、性感染症の診断、臨床経過に関する検討を行った。

【方法】

本検討は電子診療録を用いた後方視的観察研究である。2020年1月から2023年1月までに、当院で性虐待・性被害後の対応をした症例を対象とした。院内の子どもの生活安全対策室に性虐待・性被害の疑いに相談のあった症例について、年齢、性別、提出されていた性感染スクリーニング検査の種類とその結果、性感染症に対する治療・予防の有無などの情報を電子診療録から抽出し、その結果を記述的にまとめた。

【結果】

患者数は36例で、そのうち34例(94%)が女性であった。年齢の中央値は11歳(四分位範囲:1-13)であり、受診理由は、性交渉があった(またはあったことが疑われた)症例が17例(47%)、帯下増加や陰部痛などの症状から性感染症が疑われた症例が9例(25%)、その他が10例(28%)であった。性感染症の診断は、性器ヘルペス2例(6%)、淋菌感染症2例(6%)、尖圭コンジローマ2例(6%)であった。その中で、元々性感染症の診断で受診した症例を除く27例のうち、当センターでの検査にて診断が付いた症例は淋菌感染症が2例(7%)であった。淋菌・クラミジアの予防または治療としてセフトリアキソンとアジスロマイシンが投与された症例が13例(36%)、HIV暴露後予防が開始されたのは4例(11%)存在した。

【結後】

性的虐待や性被害が疑われて受診した患者に一定数の性感染症の存在を認めた。このような患者への性感染症スクリーニング検査項目や、治療・予防の最適化が今後の課題である。